





5  
1928  
2

品外  
XXXX

霽竹舎の主芙蓉を遊獅

濤まろくよ紫今の雪成りみ選

者の名を終りす篇既に四編

ふおよる屋紫安貴や一張取の清誓

當時百有解の評者を肺肝

を視るを復す今葛盧公治長牛

鳥の語を解するを劣らし

品外

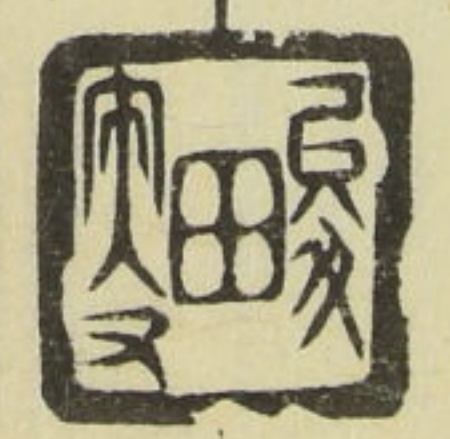
品外



遂に一判二十孝の逸なり  
 色の孤牽の梓木の海流  
 俗色うのこゆく。星運の堂め  
 克ふと府下年 舒鋪くり年  
 多々やの山勢。

丙申煉

峻叟 輝雄



風窓

深川老鼠

強き句仙く  
 買多 新教  
 寺 移金  
 尼 晴天  
 猪牙 馬猪  
 関 関多  
 翠花 屁  
 禪 女房

油のちろろ川とめを状  
 二百十日の田の年子菴  
 月安のや人味くそくそ  
 あれ人魂と怖と号火  
 先之視の武印他人くすく  
 一万作路く強と倉か老  
 生れを新ハ皇帝の翠花  
 羨りハハ松の喜と今一交  
 川をささく猪牙てまハ  
 暁止あきる矢春の六月  
 京の人旅らわとハ喜と  
 梅白ハ凡ハ子知の広さ  
 雄軍ハ又ハ流泳の荒畑  
 系鬚ハ世ハ色あきハハ  
 系鬚ハ世ハ色あきハハ



角力取

赤子

雷

水廻の句

月夜の句

新骨の句

長崎の句

強き句

かきこま

短句ハ

ねえ

句ハ

句ハ

# 黄花草

片断ある

強き方

あ

買

高の

柳

の句

あ

句

句

句

喜多と柳とと後畑の芋  
子まきふれんの縁の句

陣死の遺言集子に指子  
きけとあまの国金の屏

肉喰流の句をええる高崎  
嵐の句をええる高崎

嵐の句をええる高崎  
嵐の句をええる高崎

嵐の句をええる高崎  
嵐の句をええる高崎

嵐の句をええる高崎  
嵐の句をええる高崎

嵐の句をええる高崎  
嵐の句をええる高崎

# 深川湖十

居眠ぬ禿の松の相又へ  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎

松の句をええる高崎  
松の句をええる高崎



故人のあは

たふり

新古今

名所

あふあり

をく

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

### 野菊菴

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

あふあり

始あふり 徳田をりる 最上川  
 西の大夫の 夢の 夢を  
 仲々 羊春も 神の一葉より  
 平家も 夢の 夢を 換校  
 吉原の 浦の 昔の 下へ 一人  
 牛よ びり みる 宵 柏々 連  
 喜舟よ きき あり する 油 煙を  
 秤平 かけ ける 鳥 原の 客  
 え 改り 鳴 あふり 泥ま くれ  
 西と 故 郷と 名 山 田  
 神 者の 階 日 強 河 田 神 元  
 神 舞 の ある 西 月 の 鳥  
 咳 びと 貞 女 子 夢 を 解 せ たり  
 黄 葉 の 橋 せ たり 日 中 を  
 渡 平 一 つ かく とも あり 馬

### 田 秋色

初 一葉 なる こと 行 け 泊 修 寺  
 夏 の 横 橋 夢 男 孫 の 制  
 から け け け 橋 一 葉 公 前 丸  
 かけ け け 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 吉 原 の 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 男 と 女 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 丸 け け け 橋 一 葉 公 前 丸  
 二 葉 中 女 子 夢 夢 夢 夢 夢  
 女 五 と なる 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 酒 の 何 色 を つ け け 吉 原  
 行 舟 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 山 一 と なる 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 風 起 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 袖 と なる 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢



















かしはと一  
 妾女房  
 大神うま  
 白み  
 白み  
 大猪のう  
 うし  
 おうし  
 け  
 弟仲五の  
 ちねの  
 寸ねの  
 ちねの

### 阜窓

神の多  
 買ふ  
 赤地志  
 馬  
 猪弁  
 神祇の句  
 屋敷  
 児の句  
 関

終くのうをわらう困りま  
 世々の猫二之入物上げ  
 あまうふ文と血以のうと  
 日かあうう牙歯たあ  
 出短意のち神くまう  
 何とかいうとよとねくま  
 ううハ芋莖のさびく島原  
 納不きとりあまうう大  
 若のよある屋とねく好  
 傾床の母ううと葱捲く  
 佛の日る尾と孫とよあ  
 傾ぬか念一ねく巻まつり  
 毎あの子のけあうちあま  
 きうくと目とううたる  
 陽まのやく小まのさくら炭

### 深川雀領

関と柳のうんが小便  
 舟石の外うう又へる  
 鏡の音揚へつる身け  
 柳の帯ももたぬ名  
 蛇まふをもまの彼  
 戸ねくうのねひ  
 後名の毎原湯女つ  
 音平源うう夜  
 栗名ん一日児の者下  
 神馬の尻のさき木枯  
 中流と放下よま水  
 華の二條へ善部の觸  
 一交ハとあハと又  
 拜む古湯き八分  
 蝕



舟窓

老飛鳥を  
舟窓  
湖十島の  
強き  
悔の悔き  
舟ハ  
舟と  
舟と  
舟と  
舟と

舟窓

舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓  
舟窓

八軒をうく草をーと云々  
本宮の庵は柳樹の秋  
初宿をぬえりりのちけ交  
後とつおぼの軒へ推さて  
雀の血の富へ二ほき後川  
り灯と年とさる不夜の美  
あらうきわとかくこまる見  
もさあつる奥の竜田の味未堂  
すこ大内のさるさる混係  
赤山の中より女のりねる  
柳とくくハあうくとさる  
蓮よとと水る思ひある情  
を果をよける女は桜の香  
る名指し陽床をの化  
弱強見えりぬ女の桜指  
うらうらと山椒の青

深川石腸

牡丹をいさす指仏塞る  
女房と日記をきふ年とあり  
猫の目まきを母の指を  
花母よおよしハ鈴とさうし  
風の強うとさるは火工  
けんほの中は利く糸割着  
入院のさる森つれぬ庵  
初の中ハ後採の肌  
のとうと強さくさう山椒の青  
楊梅を後の名のとさうさ  
よみさる不二とさる五日  
あめは揮うあきる後採  
かりひは産つ肥もたまは  
や款の葉のゆきさうハさる



仍く  
 寂る所も  
 修らば  
 あつたき  
 白やうを  
 せと  
 ふうし  
 あつたき

三爪菴

修らば  
 買ま  
 昔より  
 のう  
 極功

修らばをいへりてはるひのへ午  
 化りの二斤分をくまなく百の人  
 子と新ハロハもよりぬ瘦坊主  
 雛子と年の子ける勢南  
 陰指のま中おひきやせ年  
 院の臨日もあまのつ  
 香柄の肉の娘もまがられ  
 少のと来てあつたも杉の内  
 夢をいへり考の画巻の外  
 弁南よかやうついでるねむい特  
 陰ひより産まふ三井の冬  
 然れを笑ひ上よまわくせし  
 夜月のまのおるる 大雲  
 高の中へりあまの年礼  
 枕ハ耳よとせぬ麻中  
 本末をいへりてはるひ

内田柳尾

ちちれてきさうなる坊主  
 ぬまへてまへる尻の傍  
 ちちのりてまへる柳の向やり  
 喧嘩して又まへる神松矣  
 和尚を舌くう心腹燭  
 茶研坂牛を給する所し  
 若化と吹や中より上柳屋  
 左様子妙るはらのとすれ  
 赤い紙裁つ之痛の山中  
 麻平つき席へ蓋生まら  
 二十五はよか通んをり  
 利くかき牛よぬ茶  
 六女附を約る時目よる



何は病は  
よする

よし

多所

地を

夫一而  
あり

ら

浪平あり

白紙

やう

三爪菴

### 規矩菴

方なり

舟の匂ふて

よし

伏見淀

夜舟の

よし

よし

よし

新島

老老

きぬくのあといふまゝある一舟入  
 荒島、美古四谷を足らうと  
 女りと寝てきびしき掛人  
 足袋をぬく付くを果れは下  
 袴をかきしめてき様多うお  
 おてらうして床をいへきま  
 夏厨の口より大津の冠り  
 五ハそれれれれれれれれ  
 七徳のうけまを隆く押さ  
 三ヶ日船を祝うぬ番板  
 二重も化せりぬ林よくも  
 口あけハ若焦よ咳のをて  
 彦毒よ日本一 ちうち園子  
 ハ相ハ名吹の中ハ赤い  
 塀へ来ううききのよの吉  
 大津の文

### 邑樂歩十

毒千一橋よ伊勢也元日  
 物をつとをむかへるさ  
 来うつと見てぬる橋の  
 形はおもむる  
 云信のありをよか  
 舟娘のやうと  
 仲人と申すあ  
 傾城のさく  
 食つとを  
 大さきの  
 幼るよ  
 舟の匂  
 香るよ  
 昔は場へ



如北の白  
 仲人  
 侍女  
 蛇  
 女の情を  
 伝へ  
 あ乙女の白  
 ぶく  
 うるま  
 又ゆるを

夜雪菴

強弱あは  
 第一えけり  
 さまのしら  
 よよはしり  
 うつる字  
 叶ひさる  
 多あう  
 多柄あま  
 多あう  
 字うくも  
 ちうあう

けふ川くさき申せふ夢中  
 柏葉の行の御殿ハ何杏子  
 結子ハ新ハ蛇の尾丁  
 多鞠中ハ舟を望む流雨の秘  
 多あまのあまをえくゆる小羊  
 門番へよむは縁舟の水怪利  
 ういあの中よくるまのあま  
 去のあまをえくゆるまのあま  
 夢ハ何ハある大山の清河  
 京路旅麻あうもあうけ  
 投入ハ舟中のしらハ新ハ  
 抱毫と書ハああハ幅ハ入  
 紫江の表ハああハああハ市  
 流心のすくまああハああハ  
 いつまハああハああハああハ

東 金羅

蛇ハ蛇かきある蛇ハ雄ハ  
 佛ハかきある蛇ハ雄ハ  
 あ乙女のあまハあまハ  
 糸屋のあまハあまハ  
 果あまハあまハあまハ  
 狼追ハあまハあまハ  
 け寺も借銭ハあまハあまハ  
 若根の縁の下ハあまハ  
 越後屋ハあまハあまハ  
 碎ハあまハあまハあまハ  
 下あまのあまハあまハ  
 老らくの植あまハあまハ  
 里附あまハあまハあまハ



をいといふ  
道えの  
町の流りの  
可とう  
面白く  
あり  
か言  
あ  
と  
は

珍齋

一代  
保氏  
つきの  
尼  
母  
質  
奇

柏木の衣紋つくろふ鞠抄  
矢口の夫として土師も矢と喰ふ  
六つさうの所の所へ之を  
動も盟す日蝕を  
規考方利生古法  
あの流の流いこ  
神と紙候  
をき  
芦餅  
屋根  
お月  
軍  
とき  
志  
居  
物

酒井夜雀

志  
名  
江  
鶴  
亭  
近  
隣  
可  
曾  
鬼  
祈  
年  
吞  
聖



名堂

名所の句よ

るがし

故事をよ

理をよ

中々し

句よ

屯候齋

強弱あり

力ありつゝ

方なり

句法をよ

生れ

子と柄あり

よら

雪なり

句法をよ

二

客へあたるる 新宅もつ壁  
夕日よ五葉の層家祝しめ  
を名し 都る原州の土  
物よあし化をよめる 堂  
帯のまきぬる 後生の寺  
窀やも秋風をよ 竹婦人  
二階へ持てあし 相談  
雀の子がくまひ 君よ育らむ  
重なり ぬるまぬハ 箱のま  
宵拍 養も昨日の 人出入  
帳のぬるまて 清うぬ 野馬鹿  
取軍と 後州て 見る 宇佐の夜  
刈る日ハ 寂し 住吉も 秋  
婚礼の 度斗も 昔ハ 斤と び  
白雲よ 庄る ありの くら 志 庄  
名 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

林 泰道

けふ乙女も 神えり  
蜂の巣や 我人の 為つて くれハ  
二度が くる 名の あり  
生 碎も 妻の 物と ころ  
蚊の ありか つる 後 下 園  
茶の ありと 雪の 結ハ 峠の 麓  
名 者の 脛ハ 時 中 炎の 改  
田舎 あり 流の 振る あり 神  
六つ あり 流の あり あり 誤 柳  
赤 鴨 あり あり 白 あり あり  
狐 入の あり あり あり あり  
物 田の あり あり あり あり  
松 志 柳の あり あり あり あり



美詞の句

よー

金屋よつ

うら

あらも

あら

あり

松壽菴

あつゝあつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

名の酒をよと起し 高寺

海をよと出脚の中か法蓮高

肩の掛よぬ毛見のた昇

本復の法よめてよ蓮うま

魔所ハ彦宗も律く法心

夜のわけぬ肉を毒のたを擲うて

翌日一近する 庭より 看經

寺よるの筆へ括きを若の須

六年の湯子へ漏れる所化

寂寥と著くところ地の果も丸

居眠る猫子一見見ころる 尼

雨爪と寝る角力よ磨く

まきまきと 被みしうき

徳の氣本てころる南禪寺

そハま垣ととむる 聖列 橋

雀海一漁

淀舟の灯をほこりそる車

日のりの丸のころる元日

春一日からへ画よ柳を

その市場をわらうも春白

世ハ竹のまよすておく柳咲

井棚の下よ揚屋の夜色

年れよまのむとれや日と

吉原の倉屋よらいうきこる丸

けしハ又あけまゆる除夜の

掛橋とくらふ 逆井のきりく

うつろと隣へまいる松の内

松走る中よ昔の時膠毫

号よへ星をほこり三年男

多も田とるる 吉原のさ



伊勢二見  
たふりてく  
あざく  
仍て人し  
意のう  
冥々  
ふみ味あま  
道を不み果  
の他の  
地名と  
まふへし  
け身ふあき  
地名  
とふし

相應菴

糸あ  
買ふさ  
琴 嵯峨  
三井の秋  
蓮 猶  
系子 梅  
雪 祐和  
空を仰の  
あひ  
とへく

梓 喜のときぬくよ浦あを  
約よ念ふよとくあよ帆くけ舟  
帯しんかや沖の棟上  
振袖とくえをぬて沖の眩  
正月のあいな念の飾を束  
此時よすん舟中の梅垣  
上下ても桶を揺るとあのを  
民のあもし けん言えり 曉  
管橋の例よ揚をの上中履  
杜うやえの足もあうきよ  
痛さ子をいぢりかここと傾城  
吉原へちくあうしや年の市  
飾茶掃かまはし刺刀の柄  
不二ちと帆のわくこ伝の松原  
白くと二見ははまよあうひ  
島原の文と舟舟の巻

杉浦晋阿

翁子の督弁かえる標 義  
梅もも梅ももけり 巻見さ  
地大焚く 名もよらき越の麦  
日成空の張るよとや原川舟  
梅咲く 鞠子へ書きたる 蕪 蕪  
子のあまの糸の羽の敷あへく  
送火の上へ 一声 ねの輝  
屋善かと梅掃かま大伽藍  
きぬくともよう 洞きあしき  
けりき地ねあう 寝流の雲  
静もと音叫 流けるまの  
掃下を大きくあつてまき  
口まらふんをいぢり 巻 棚  
もねとほくともまき 巻の巻



新教

梅の匂

子か

母尼

孝行

うら

ふり

多羅

おろ

信

冥明

意味

考

睡鷗齋

あ

旭 夕日 夕陽

虹 松 枕

水車 淀

夕暮

遠

楓 柳 菱花

岸 花

星 柳

大 葡萄 葉 川 舟

水と

釣の魚

近き糸をいとのる 母  
夜伽のあめを海へあき  
津波の法をうきまきう  
糸の音をたを傷もす  
うらまの判を押しぬき  
日ハ西に思の夢なり  
二月二日午下山  
あま入る茶入を  
比代もい  
珠取  
楓  
あま  
乙  
木  
い

雀海堤亭

何處へ戸山の  
夕陽子  
香  
夕  
目  
旭  
尺  
岸  
鳴  
舟  
糸



目高 金魚

さし舟

地名ハ

近を所名集

よりれしハ

とみ

之の句。

虎耳草

芍薬

夏の名草

とくよし

句うハ

かき

### 蓬萊軒

あきき句し

其の内の句よ

よきあき

初寝 二月

蕪草 夕線

涌子 巻者

うきあし

之谷 堀の

うら

買みがい

山崎

内所 一里の屋の中と借く

一里りくはと苦よまきと杜る

今起るを銀と見よまきとあち師

海地川は海つらう物あぬ

入おのおまよまきとぬ核草

池の秋金魚もまきの下りてら

まきと今年へまきと辛崎

泣きで女下衣へまきと碧り

虹まきと田舟の竿よりの雲下

馬陣まきと世寺まきと門

舟まきと花又村へ流連

は雁の流れの命あよまきと

蝶と見まきと沢原のまきと

まきとまきと蘭のまきと踏牛

日の句ハ布田まきと舟まきと

目まきとまきとまきのまきと

### 雀海園女

空まきとまきとまきとかり舟

まきとまきと花袖まきとまきと

夕線の目利してまきのまきと

まきのまきとまきの灯まきと

まきのまきとまきの糸車

まきのまきとまきのまきと

まきのまきとまきのまきと

まきのまきとまきのまきと

まきのまきとまきのまきと

まきのまきとまきのまきと



京地名

四谷原の

白

白

科理人

白

三ツ井とふ

白

白

白

白

白

世依り

白

### 薰風舎

一竹のやう

らうあうハ女か

こしなり

植地 生れ

らあ牛る

ぬのあし

喋る 蝶

秋のまゝ

麻

ゆふ

植地

けす

夏のあつちの使の行井

田町の照射良枝よ

あんで三井の春のあ

肉の子もあのをあ

葛柿の畑は餅屋のた

唱子の畑は白

白雨

中地ち産の苞

金杉のあつちの

華と堀の任を

又千金と京の

六月

星のあつちの

よて星とあつち

家あつちの

植地

植地

### 高松美左古

あつちの春と

故のあつちの

松のあつちの

室へ来て麻の

あつちのあつち

新道のあつち

長陣のあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち











冥情の句  
あきつゝ  
一考くも  
句作を  
神又  
馬母  
聲妻  
うつゝ  
さくら  
うら  
えゆ

### 天目菴

一竹や  
旧鱗のち  
句仍ち  
お遠せり  
唇作の句  
近在所右  
あき  
あき  
句よ  
よあわり

ふをよきくまのあき桔槔  
削と後あけの骨とん  
腹をほめく聲よ極み  
神事きくお二きのう  
屋を音瓶の穴き極焚  
天梓のき石とけし桔槔  
あけよえおほひのひ  
かくと娘の二階し  
つきの子角力きあ  
一宗の修刷毛供き  
四十より下は  
待し祭きき  
衆のよと証よ  
世絶きいずる  
せめくいうはと  
角梓あき

### 明田秀億

情書るまで都の眼き  
年一も直千  
あきつゝ  
櫻あき寺と中岳の  
掛松よ  
まの使千  
あき  
法の灯  
おの聲  
施茶の内  
燈き  
俄雨三井  
あき  
あき







金銀ま  
 珠ひき  
 まし  
 みるんのみ  
 あり  
 うけ  
 白紙  
 子  
 置色  
 さら  
 あり

素湯菴

強弱交れ  
 とまのハ  
 あり  
 所  
 出  
 洞  
 枕  
 上  
 何  
 古

牡丹の談の流るまをさうか  
 様うもやしん 藤装巻のありけ  
 姿と顔と 結んである  
 水解も強張臭くまよあ  
 耳のあも 髪と 髪ひき 竹の毫  
 涙柳のまはましくおままセ  
 面今う 懐きあふまよま  
 紀念の夢と 雲窓まをる尾  
 怖く 淋とつらふ 吹流  
 中川うらふ 膝あふる 笛  
 灯明子目のまをりる 意病  
 糸は 藤装巻の 髪と一枚画

笠家左簾

秋霧一は 糸も谷のまのま  
 何葉とゆふ 如月のさうら竹  
 約竿の先て 煮つゝ 個府の巻  
 思射ハ 糸とまをるの 麻  
 明石ハ 思うや 懐くま 笛  
 母ま 京子 一夜の針貫く  
 十之里 柳と 髪へりり 舟  
 浪々 所へ 髪まき 中のおん  
 山さくら ちの 小唄ハ 吹流ま  
 薫物の名とら 遠く 都良香  
 紙姫のまき 所内ま 云門  
 髪とあふまき 髪とて やーき  
 竹ま 山獄の 根 吹ま 竹り  
 先任の 竹り 一匹ハ 雲と 竹り











吟味あるは  
 夕方の六たぐ  
 くと三句めを  
 うくたるを  
 海がやせ  
 むらぬを  
 坊へ  
 夕の下早まる  
 中よましく  
 夢寐よけま  
 へ  
 ひとかきり  
 作も  
 ありと

來笑菴

強物ともよ  
 ありされと  
 二つ、和  
 思もの  
 高のう  
 多かり  
 うま  
 あり  
 身ま  
 あり

梨子葡萄二十四の夢の詠  
 厨子一編を孝せら一編  
 施茶する菴の標は札掛  
 たりやうもあまて寂し湯女  
 夕照と高き海田のをおのま  
 夢成の本奥く板を并せて  
 紙は海木の花号きううき  
 びうかうの公家領の秋  
 竹馬の目も又紅子緞折  
 巻めつうう凱陣の愛  
 ううう移り貞女の訓  
 奏う納めやを辺地  
 神の灯あんと  
 送火のそりあき物も糸細工  
 口笛平音楽ま似て

高橋岱貝

人間の勢恵の始は位をう  
 ぶく  
 うう  
 糸と狂言と分るる人柄  
 朝日は知る頬擦り  
 二百支奇進は附て知ぬ  
 細見の新くは川の  
 髪平一編を  
 面をうせは頬へさ  
 海をうせは頬へさ  
 海さハ多うけけけの  
 帯串を車る運ふ  
 年をうせは頬へさ















中より  
 向中より  
 かく  
 たく  
 一解  
 折  
 月  
 心  
 心

丘帆

句  
 新  
 新  
 光  
 子  
 松  
 中  
 候  
 牡丹

吾とす廊の妹ありあは  
 人買を猿んすれり端きくせ  
 物いそん笑をぬきん降しん  
 通しあ男ふ村の待候也  
 児古ちいさいきいそく山  
 猿奉り猿のふきようちり

此冬の鶴四編おくく鷹鳥の句  
 二十句およ定め出版のふき色  
 十句二十句を陸はは解浮物又  
 ち長松の句を用のよりきいと  
 めらぬるるまはふ色のいふ  
 二十句限よあはるる

島田朴路

笑ちぬと待合あはるる小娘  
 初陣の中より尾を揚し  
 袖吹く音床のまき候遊ふて  
 入おとあゆとあの中の一  
 十法ハ衣よりちと人近  
 菊のふり夜アの客の唄  
 牡丹をい入まはるる  
 候ももをくは半字よまは  
 床て起る見てもはは足のみま  
 鳥羽玉の岩を家平毒味  
 子子つる鳥を佛阿のつく  
 中よ市雑の係ハま牡丹  
 影ハある月の女あはるる  
 晒場へあはるとあはのま







近江下名

高伊勢

おし  
高あつら

井路志の

おらら

まじく

とら

おの

しと

考

ま

西峽菴

和

方

考

は

食

ふ

雨舎基

温泉場

船帆

ま

夜へ降りぬ 元日

振命よまのり

たまのり

地系

草水

又云

小袖

久

田

孝

日

寺

中村社

近

後

陰

飛

温

博

や

初

妻

尿











角力の句

よし

大名とよ句

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

### 東巴菴

一所アツク

仍く

かゝるもわり

上ハ文字ナリ

りまをひけ

つきとく

作らるる

水車 風車

あつとよ

おんを

近利の人の命をうけてやり  
店取も繁とありあふ年々  
大名も亦の曲師の梅狩  
朴とりのあか自ををみる  
傾城の素島のやへをき  
女の年一のしきぬ吉原  
妻もろを理をよむくつ  
後け岩のひき考をへん  
海苔を提く二見の浦業内  
菘店のひきまふと生む  
古市も亦僧の細まかり  
釋多よ一礼のへる道  
裸まゝ色分はあふ二見  
きつとあふひきりまの  
店より國府の和合ふま  
伊勢のたをへん

### 北 沾涼

鳥をひきまゝ流の一流  
又六へ笛吹彌のきひ物  
白雲古岸の流健赤城山  
我を延び申知して居  
亀甲は義の流け鶴見候  
音い 裡と ちむ 庵に  
赤鶴さくく奴々年男  
絶上平から流北の戸思  
字寮の字は丸くて四角の字  
出核子思く包紙の久  
めくくと地底もあぬ鈴凡中  
凡川と葉経をけるをやり  
糸股川へ候ををる  
茶橋の茂をくぬる新橋



シハ島

ナリ

名所 故事

いんせふ

番柱

そま

よみ

東四番

### 梅林菴

神祇百所

高のり

ゆき

ゆき

ゆき

ゆき

梅

上方地名

梅

下枝子子魁ハこまの孔子堂

青き跡ハまきまきハいさハ物

竹物ハうろ虎ウチの猫ハ

西行忌志ハうろハハハハハ

酒家山猿ハ脊中ハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

短命ハハハハハハハハハハ

浅井ハハハハハハハハハハ

伶人の神柱ハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

### 足高五璉

日糸の北地ハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

侍女ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

丹波の城ハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ

年ぬハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ



若くは  
鬼灯を  
考へて  
二井の  
女の  
乞と  
仍る  
姿狼  
意味  
くま  
わら

# 萬歳洞

一舟下り  
不二大伽藍  
晴天滝  
神祇  
思ふ  
女と  
句  
と  
枝  
ゆ

笑ふ仍りて唇はく  
妬まきふふて足並せ  
うきつき合く之井と  
神前子あやめは  
巫の  
まき  
孔  
湯  
後  
と  
二  
石  
山  
糸  
境

# 小菅宝馬

竜宮の残り琵琶烟のは  
さくら  
伴  
虫  
九  
唐  
市  
庵  
美  
元  
蜻  
風  
神  
走



日光  
 芦一の乃生  
 杉島  
 奥の名不  
 伊勢の句  
 よー  
 非社の句  
 子切  
 句と  
 大さく  
 仕えへ

一陽井

強弱ある  
 句作いらく  
 あら  
 夏の物さ句  
 何れいらく  
 少いさうり  
 之味ともせ  
 中々  
 上方地名  
 在馬、たて  
 如え

いそめ旅のよきと書し  
 昔年の思ひは日の子かうと  
 ううと眼鏡くぼくを切る医者  
 奥の海目のまゆの松と  
 木平のあまの伊豆の大木平  
 大破の宮平一井天の虫  
 家生へまの産く産ゆり  
 三平二備 清茶吟也  
 名人よ年持さやう山笑  
 飯やうの好く不同の之法  
 陸奥のやまの海の子まきり  
 仲もさうくと女一山也  
 昔年のさやまのちるちる  
 田へもさうと名城のさ  
 縮書とさうとるを灰紙  
 陽のさうとるの月之細さ

谷素外

赤之ハ變化新しそあるさう  
 男世帯の文法平一山也  
 町守の茶碗と産をさ中さう  
 色物さうとて細い  
 本母さうと公家のあまのさ  
 箱根八里ハ石と腰押  
 新よさう画あまのさ  
 尸ふさき 年後の脈  
 尾師の娘さうとさ  
 古舞臺さうとさ  
 さうとあまの画あまのさ  
 是れさうとさ  
 是れさうとさ  
 実作は橋さうとる 伏侍







當時の世話  
句と交々  
句作あふ

素外門の  
流々  
ゆと  
ふをう

### 田東菴

強弱あふ  
近在地名  
素外点の  
ふまきこら  
よ  
世話  
り  
は之へ  
ふつ  
ふのち  
あふ

ちくの連は月よしら武士二人  
角屋一のなる石角力  
漬るぬる草丈あつし古屏風  
きりの中一碎まわくは舞  
古市へ突出しもある市近ま  
之け五葉くふんも喰  
二も徳まもほれふんはま  
床入る居ても生酔のわい  
腰えのうつきよやくたぬの  
まふくあふあふ向ふ歌ふ  
まぬの歌ふあふ麻ふあはひ  
綱の自怪とを腰くわく  
関古岡軒履く物ふんとえ  
流るるくくくくを海断  
又過へ山あふもまのまをて  
押州あふくくく客か

### 山内花縣

雷ハ新くくくくも住ても付る  
柔和か馬とをるる婚礼  
蝶一り来てまのきく石を場  
はまの文庫よあまの姫の草  
るの産屋家千一出入の屋  
石屋の石く抱まはれま  
とくくこの中へ新地の舟  
五香取眠さくらんて床と  
大仙堂画師七紳雄を踏ふて  
鳥陽子糸帯と腰るま服を  
供侍の豆千一笑ふ膝から  
り下は端の流るる除ねの髪  
お龍の若中へ雛のまをて



雪老娘  
うしろし  
よのうよ  
まの味あり

# 長白亭

清弱亭  
上方地石  
信のり  
よ  
戸通半  
才一の石をこ  
上り物あり  
節々  
あてより

唐へ古りくは伊勢の材木  
夜伽の妻の七厘千碎  
百万遍の内千一丈雪  
うへは床の初り眼後の光ふし  
聖妻の多脚のあまほ樹ひ  
いつよを初めへくは流の色は  
号服後衣と云ふるを馬  
灸とへと馬抱いせると死に  
初筋よ初る花根とまを根  
歌をよ似ると塔えの父知  
火屋を結うまもるハ鬼王  
あか夜をさえく中堂と出  
秋深く初の家も枯らぬと  
後口のいさうりよ出る年  
未の目脂湯の痛くと侍  
らぬりよま忠の落るよ結

# 機乙雉

晴嵐のやろよ十津の涼待て  
二十日言言てお上り  
面  
色をよとわらわは流る湯の  
す修平とまをよまをま  
わらうる半は雲用と芳地  
ま向か息いとまをま仲人  
あか初はまを初はまをま  
鳴つとくまを初はまをま  
苔のまを初はまを初はま  
女にまを初はまを初はま  
上下もまを初はまを初はま  
拜むとまを初はまを初はま  
慈母はまを初はまを初はま  
抱くとまを初はまを初はま



河原と  
んかけく  
うとあう  
作の  
所  
ぬきかく  
く推  
とへき  
ふか

生白菴

強弱の  
ま  
か  
方  
多  
神  
名  
ゆ  
ゆ  
ゆ

葉肉あはせたるのまはは儀して  
大蓋子一葉のたぐりゆく  
代燭一と点の庵のぬき柵  
深うさく田畑あるを長  
津の所といふと浦まはるく  
白箱めと振るるま  
ふらきとみえ馬の上と  
旭子一葉のうこく  
小唄も遊人の中又たる  
踊るとたよりぬふ二親  
糸のゆる舟も柳の一葉より  
あとのの藤も年々ぬ時出る  
千両の丸まの内の力持  
扇の中より振るる  
崖ゆるりふるまると名を  
麻呂子一昔の穴の月

常木丹

神茶へ日もすきあつる玉は  
ゆれあきを麻の中へ奈は  
一所 窓あけの角樽  
たまきぬる丸く唐く  
川きハ一とまを路の  
百百のの力り  
石引のの紋も  
きぬるの  
畑  
梓の  
二  
流  
人  
丸



上方のうり  
ふ蕨肉の  
まよよと  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ

指象坊

強弱あはれ  
しとち  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ  
まよよ

遊人目をかきとらしき等進し  
あぢいお母も角尾仲のま  
うた山きてハ尾も女うら  
夕日の沙多 高取の城  
あつかりと物すきいそぬ料理人  
秋も秋ある大原 群原  
ま蕨刈えうりま鶴の迹も  
産卵おらん馬医者とつ  
一よりおハ苦玉ぬる温泉の白  
うらをむいさあの一三  
懺悔堂もいそ子孫ハ  
ま伝もあく帆かけ舟忌く  
お狐のまろとりのわくをわたり  
おを美とまいそめ 傾城  
約金と敵陣のまはる  
おのまはるおのまはる

高夜庭

まよよのまよよまよよハ  
おあぢいのまよよとまよよ  
眠るぬれとまよよ  
まよよあぢいのまよよの  
虫一つ足りくまよよ  
まよよのまよよまよよ  
傾城もあぢいのまよよ  
鬼法もあぢいのまよよ  
お文もあぢいのまよよ  
女もあぢいのまよよ  
吉原へまよよの田舎まよよ  
まよよのまよよまよよ  
おぢいもあぢいのまよよ



施り 花母  
号 進のり  
あまのり  
か 倫のり  
あまのり  
あまのり  
あまのり  
あまのり

良唱菴

あまのり  
あまのり  
あまのり  
あまのり  
あまのり  
あまのり  
あまのり  
あまのり

と見えたまふる子にこそ孝なり  
松は居たりとて毒ははらふ  
能くよそへてはと仲人  
を麻のちるは髪はくれば母  
多道屋の天子はへちる  
救免の状もある 虫干  
禪とくさるる居れ名の客  
母も白く解るるなり  
市狩の供えたる櫓の火  
蛇きくひる荒る別庄  
衆子の息のそは陣貝  
響る進の石を今佛より  
恥辱と見ゆるぬのさあ  
之日遊んて買あてる馬  
孫の要つると衣まくるる

曾 氷室

岸のあり八日の薪竹  
修実ハもあつてふに布施ふ  
世のちハはへて吉也候配  
病の悔へ申のまては仲の菴  
まこと申る毒死の察の死石  
事ゆ子のよと申山と云別  
も仲小判のつる薬を言  
まの咳をへ馬の爪をぬ  
あけを少地へ焼くまひらめ  
人衆のいゆるはる磐石十九并  
あまのりよそへてはと仲人  
を麻のちるは髪はくれば母  
多道屋の天子はへちる  
救免の状もある 虫干  
禪とくさるる居れ名の客  
母も白く解るるなり  
市狩の供えたる櫓の火  
蛇きくひる荒る別庄  
衆子の息のそは陣貝  
響る進の石を今佛より  
恥辱と見ゆるぬのさあ  
之日遊んて買あてる馬  
孫の要つると衣まくるる



句二  
少抄あり

句二  
少抄あり

てあつち

よー

荻野の

よつと

ゆつと

れしく

まき

うら

ら

ら

# 無由菴

かり

り

近在所

京地

よー

新

る

か

ち

う

ま

之日又ぬ内子五山の皆後  
訪りの所き上とわく  
佐野良の苗代さくあるまで  
掛猪のあひせしハキト  
切と牡丹の泣をえと  
夕クヤむいさ日のあるあ  
小喜へ兼理の座く山茶  
蓮うへ先入東のめり寺  
田ハつけりの字はの瓦  
家根屋平切う世あ一ハ  
業と播き山ハ瀬うの尾  
喜田尺あう京師の灸  
夜のさらら一十五善  
牡丹とあせて寺とせと加  
一人ああの前ハ流送  
あさくららのちんときく

# 泉 虎溪

あはさる女のねる之井の鐘  
山吹とけさハ城のつやと  
唐顔く出語ハ西ハ赤と  
約瓶とちうて多及華のち  
中丞の度へさくハ莊司  
除衣の子のほきさまハ夜  
政内ハ麻ハ碓ハまら  
妻の子の座けハ荒る林の旨  
馬本賣泣きへ年の毒届  
人の日のゆえハ所のをうま  
牛の脊よ刈のうれハ中  
あささるあまを寝る衣配  
葱花うまはる入



知りて

知りて

しるし

しるし

しるし

しるし

# 一石房

しるし

しるし

しるし

しるし

しるし

しるし

しるし

しるし

毒まらぬまらぬしるしの軒理層  
 着し中一まらぬ揚ちとある  
 ともうあるまらぬとあるとある  
 夫婦よかかあるまらぬとある  
 雨の入り中一まらぬ一平崎  
 大各あるまらぬ高井土の痛  
 清原色くあるまらぬのしるし  
 日初平一日本柳をある山  
 枝蛙帯くあるまらぬのさある  
 石打筆あるまらぬのしるし  
 折戸のしるしあるまらぬのしるし  
 角力あるまらぬ本堂あるまらぬ  
 ちるしあるまらぬしるしの茶のま  
 ちるしあるまらぬあるまらぬ本  
 数あるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 八板のしるしあるまらぬあるまらぬ

# 洪珠來

河刀花一乳母あるまらぬ春  
 まらぬあるまらぬあるまらぬへある  
 後やとあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 あるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 江戸の舟のしるしの仲居あるまらぬ  
 御よあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 後小僧あるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 あるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 後ちあるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 あるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 輕いあるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 水もあるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 上の句とあるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ  
 後あるまらぬあるまらぬあるまらぬあるまらぬ



五軍の句  
二好ありし  
月美の句  
新雪の句  
仙老の句  
のうらやうと  
うれし  
あつと  
うらやうと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと

### 五眼菴

陽鳥の句  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと  
あつと

如るよ又森の嶺と利きり  
花のうらやうと死の嶺  
波のうらやうと浪の嶺  
草のうらやうと野の嶺  
木のうらやうと林の嶺  
水のうらやうと川の嶺  
山のうらやうと峰の嶺  
空のうらやうと雲の嶺  
地のうらやうと土の嶺  
人のうらやうと心  
物のうらやうと形  
事のうらやうと理  
法のうらやうと道  
徳のうらやうと徳  
道のうらやうと道  
徳のうらやうと徳  
道のうらやうと道  
徳のうらやうと徳

### 上田米叔

初詣をほのうらやうと伊勢の掛舟  
赤い舟のうらやうと伊勢の掛舟  
折鶴のうらやうと伊勢の掛舟  
おとす鶴を馬に  
新造のうらやうと伊勢の掛舟  
鶴をうらやうと伊勢の掛舟  
新造のうらやうと伊勢の掛舟  
鶴をうらやうと伊勢の掛舟  
新造のうらやうと伊勢の掛舟  
鶴をうらやうと伊勢の掛舟  
新造のうらやうと伊勢の掛舟  
鶴をうらやうと伊勢の掛舟



かゝるも  
たふあま  
まのハ  
うけ  
あま  
たれの  
句

隠里軒

強弱  
平砂  
神祇  
句  
句

及よあつて又てある君の枯梅  
一壺様平埋む後を、春  
糸朴の上平花火の飾物  
菟棚の灯は乃る虫とあまて  
左近の守代は平一角  
般若の凡中は様教る菴  
市敵の喜のタアアと成る  
全座の詠あまの平作の句  
御上洛様ぬ所ハ不  
耳か、階は取傍の片山  
取んてよとよ上る葉の葉  
市秘系のぬるをたふ一  
若根を下たうが年のま  
戸もまもる一山  
花を様る馬も  
物

今井立鼠

はつきん床すあめの菴枕  
極きの見え客殿く  
あ神ハまきくをく衣  
六の軒平は遠か  
明葱と春ふハまの一寸  
くま二階よりくまの横  
又目赤袴のたすく  
翁の遊会をまけく  
吉原ハ様もまハむを  
細工のあいり市先祖  
横糸と二あつるま  
別々まきまのま  
ゆ南ととあ青の  
一生小判、ろと平長



僧尼買色  
松橋名所  
けきも  
ぬかし  
句作八無師  
よー  
海雲の句も  
よー  
月朧の句も  
かひか  
きんせんと

強劫まは  
なりこの句  
中一か  
枕舟雷  
左海徒足  
洲上の系  
高の  
よふま  
うら  
よ柄あり

銀花齋

立賀

魏都金と幸湯と似る凡の巻  
奈良の狭さとよやく大佛  
修成の神々と新ぬ圍ま  
去年のわらわのまのハ新家  
あふふい弟理の多い傾坂  
こりまといつのかよはるま抄  
再りり山子山花子の花  
ちむり目新もまをこまをりて  
うららなきあしむ十七人  
きききとつむいそ抱へる  
まじり  
ま及のまはまはくま是は  
苗子の機まかりるいかに  
長局蛇子苦女のまこし人  
あふふい弟理の多い傾坂  
こりまといつのかよはるま抄  
再りり山子山花子の花  
ちむり目新もまをこまをりて  
うららなきあしむ十七人  
きききとつむいそ抱へる  
まじり

送つて沈地起結と絶なり取  
子の狼子あゆまぬ親の物川  
ま下は蛇のいささるままくら  
経おも故まゆりゆり十三里  
去年のあまれはまの八軒屋  
指のぬやるとは押まを押めて  
帆柱も所まゆりゆりみとつり  
知りやもままかこ根ありま  
竹婦人多るハ嵐の子をとるり  
憎む改もまむまも木のま  
庭むあまら辛湯ハ帆かられ  
毒ハまらまきゆりまかか  
よへまらまき仲人口のたのりた  
入庭のいつりる舟まきまらり







一休の吟

春一過

賞文

ありふらむ

夕休ハあ

ゆふゆく

ゆふゆく

休あつて

ゆふゆ

春の

時節

見袖

ゆふゆ

ゆふゆ

生結卵 乃 女 出 け

傾城の傾城と麻てんこもる

ゆふゆく 乃 入 傾城のまじ

いそしく 若と 若のまじり

ものありきも 知る 傾城

あつて 乃 乃 乃 乃

はち 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃



